

壱 岐空港から車で十分ほど走ると、小高い山に溶け込んだ、緩やかな曲線が印象的な建物が見えてくる。故黒川紀章氏によってデザインされた「一支国博物館」。屋上が緑化された屋根は、沓岐島のなだらかな山の稜線をイメージして造られたという。

九州本土と朝鮮半島の間の玄界灘に浮かぶ沓岐島は、その地理的特徴により古代から、東アジアの交流拠点“として重要な役割を担ってきた。弥生時代には「魏志倭人伝」に「一支国」として登場する。当時、一支国には、大変栄えた集落があった。その跡が国の特別史跡「原の辻遺跡」。魏志倭人伝には邪馬台国をはじめ、様々なクニが紹介されているが、国の場所と王都の位置の両方が特定されているのは、国内では原の辻遺跡だけ。この原の辻遺跡をはじめとする沓岐の歴史や、東アジアとの交流の歴史を体感できるのが「一支国博物館」だ。

常設展示室では時代をさかのぼる形で沓岐の歴史が紹介されており、海の王都を象徴する古代船の実物大模型などが展示されている。中でも楽しいのは、原の辻の生活シーンがミニチュア版で再現されている弥生時代のゾーン。ここで出迎えてくれるのが、百六十人の弥生人（模型）たち。交易をしている者、祈りを捧げる者、家を作る者、稲刈りをする者など、弥生人の暮らしが高さ十センチほどの模型によって分かりやすく紹介されている。

注目したいのは、弥生人たちの顔。どれを見ても、表情豊かに生き生きと生きている、見ていられるだけ楽しい。実は、この模型は島民の顔をモデルにして作られたもの。二〇一〇年のオープンより前に、沓岐市民を対象に公募したところ、赤ちゃんから大人まで四十二名の応募があり、全員の顔をモデルとして採用したという。楽しい表情は、島の人たちの顔そのものだったというわけだ。

そのほか、島民が弥生人や渡来人役で出演している映像コーナーや、沓岐の方言を交えつつ解説をしてくれる市民ガイドなども、来場者を温かく迎え入れる。

歴史だけでなく、当時の人々の想いまでも伝えてくれる一支国博物館は、沓岐島の宝である。

長崎の
デザインを
旅する

Design
in
Nagasaki



一支国博物館

Iki City Ikikoku Museum

弥生人になった島民たちが
表情豊かにお出迎え。

渡来人が朝鮮半島と日本本土との海の道を往来するのに使っていた古代船を再現。

魏志倭人伝に書かれている一支国の記述部分を分かりやすく紹介したコーナー。

周辺の景観と調和したデザインの外観。

